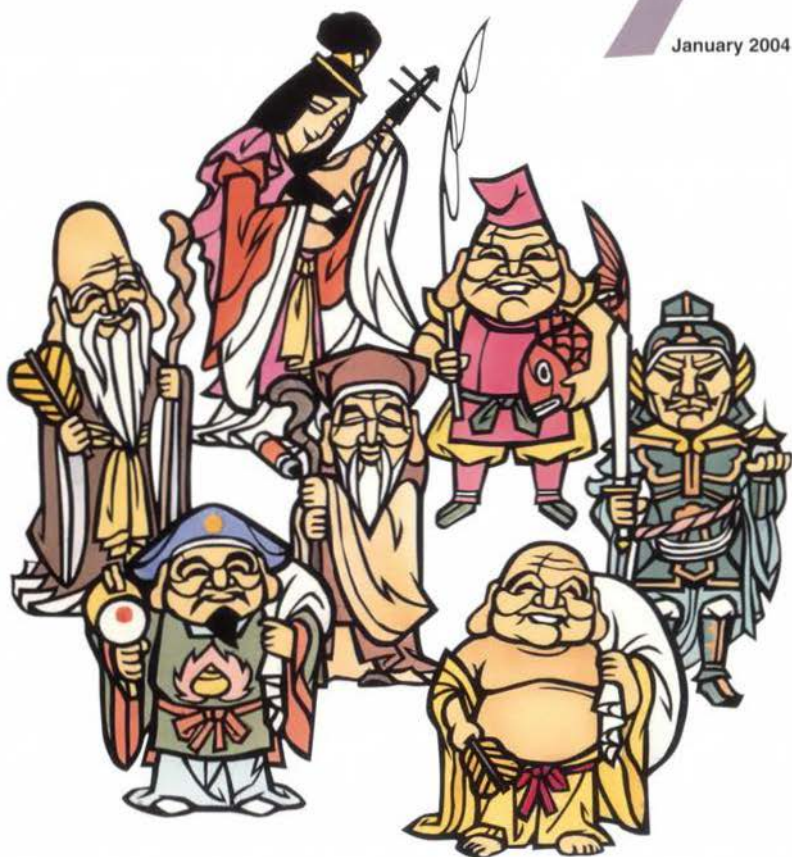


浄土

monthly
JODO

1
January 2004



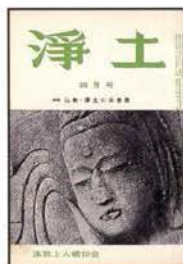
法然上人鑽仰会



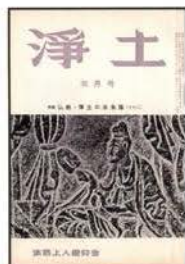
昭和38年2月号



昭和38年3月号



昭和38年4月号



昭和38年5月号



昭和38年6月号



昭和38年7月号



昭和38年8月号



昭和38年9月号



昭和38年10月号



昭和38年11月号



昭和38年12月号



昭和39年1月号



昭和39年2月号



昭和39年3月号



昭和39年4月号



昭和39年5月号

寺院紀行

寺に歴史あり
人々に信仰あり
日本の
心の故郷を紀行する

駒ヶ根

安楽寺

鶏頭山往生院安楽寺の本堂（写真下）と
安楽寺第二十四世飯田実雄住職（写真
上・左）。住職から左に奥様の敬子さん、
長男英心さん、長女薫さん、次男康隆さ
ん、次女翠さん、住職のご母堂、千里さん





平成十五年度の十夜法要では法要の前に、「極楽を思わせる音を楽しんで下さい」との住職の紹介で深草アキさんの秦琴の音色が本堂内に響き渡った。



本尊は阿彌陀如来坐像



昭和五十八年に落慶した安楽寺本堂は間口十二間、奥行き十四間の大きな伽藍だ

駒ヶ根のシンボルはなんといっても中央アルプスの駒ヶ岳。取材当日は残念ながら曇天でその頂きは望めなかった



天竜川にかかる橋の竜のオブジェ。安楽寺のある駒ヶ根あたりは伊那谷と呼ばれる歴史ある所だ



開山還夢上人像。開山の満蓮社行營
愚童還夢上人は千葉県佐倉の浄土宗
寺院清光寺で剃髪、のちに浄土宗大
本山光明寺で修行した

十夜法要で導師をつとめる飯田住職



住職は大学時代に書を習い、お寺に戻ってから書道教室を開いている。生徒さんを中心に二十七年続けている写経はちゃんと表装され、巻物になっている。参加者はのべ二十人余となる



住職の達筆は有名で、地元の童話本の表題や公共墓地の石碑などにもその書が使われている



安楽寺の末寺の安性寺の山号額も住職の筆だ



書道教室の会場も兼ねる観音堂には三十三観音像が祀られている。台座には西国三十三カ所の寺院名が彫られ、ここですべてが巡礼できるようになっている。中央の像は札所の観音ではない安楽寺の観音さま

浄土

2004/1月号 目次

カラーグラビア寺院紀行駒ヶ根安楽寺…写真=タカオカ邦彦	1
倉嶋厚インタビュー「やまない雨はない」	6
寺院紀行 駒ヶ根・安楽寺	真山 剛 12
表紙のことば	21
会いたい人 北村和夫③	関 容子 22
代替医療という世界⑨	井上朝雄 30
響流十方	袖山榮輝 32
連載 法然上人をめぐる人々	石丸晶子 36
Jフォーラム	47
浄土誌上句会	選者=増田河郎子 48
マンガ『さっちゃんねッ』	かまちよろう 51
編集後記	52



表紙題字=浄土門主 中村康隆猊下
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

やまない 雨はない

倉嶋

厚

インタビュー

編集部 平井泰代子
撮影 小堀祐二



「お天気キャスター」という気象解説者がテレビで活躍されているのが普通になっていますがその基礎を作られたのが倉嶋厚さんです。

倉嶋さんが解説する気象情報のなかには、さり気なく温かい四季折々の自然や生活の情報が込められているからでしょうか多くのファンがいます。

倉嶋さんは6年前に奥様を亡くされ、深い悲しみから「うつ病」になり、その苦悩を綴った『やまない雨はない』（文藝春秋社）が多くの人に読まれています。現在、倉嶋さんは、経験された苦しさや病気をどう克服されたかを全国各地で講演されています。

わが国では、年間3万人の自殺者が5年も続いており、その内7割が「うつ病」と言われ、その中に高齢者の伴侶との別れが原因となっているのが10%、30%占めています。

奥様の7回忌を迎えたいま、倉嶋さんに静かに心境を語っていただきました。



「『やまない雨はない』を拝読して、私の周りにも、家族の死という別れに直面し、それを経験したものでしか理解できない悲しみや絶望感を抱えて苦しんでいる方が多くいます。そうした誰でも必ず経験する孤独感にどのように向い合ったらいいのか、また、周りのものはどのように手を差し伸べたらいいのかをお伺いしたいと思います。」

伴侶の死は誰もがいつか経験するわけですが、とりわけ私の場合はとても喪失感がひどかったですね。

愛する人を亡くしたものがみな感じる、この苦しみは誰にもわかってもらえない絶対的苦しみです。

どんなに慰められても癒えるものでなく、自分ひとりが背負っていくしかない悲しみなんです。

よく慰めるつもりで「あなたは40年も一緒

にいられたからいいじゃないの」とか、「あなたより、もっと不幸な別れかたをした人がある」と言う人がいますが、まったく慰めになりません。

他者との比較が絶対出来ない、個別的な苦しみなんです。

また、病名や病状を聞かれることもとても辛いものです。相手は好奇心から聞いているのかなと思ったりしてしまいます。

そうでなくても遺族は「もっと早く入院させておけばよかった」とか、「違う病院にすれば助かったのかもしれない」などと後悔しているかもしれないですから。

—奥様の秦子さんが胆嚢細胞ガンで1997年の6月に急逝されてから倉嶋さんを襲ったのが、「死への願望」であったと著書に書かれていましたが大変な苦しみだったのでしょうかね。

妻の入院と同時に始まっていた「うつ」状態は、日を追うごとに悪化していきました。

高齢になってうつ病になると、3つの妄想に襲われるといえます。

1つ目は「病気の妄想」で、少しでも身体の具合が悪いと「ガン」かもしれないという不安。

2つ目は「お金が無くなるのではないか」という妄想。

3つ目は「罪悪感」です。

私の場合は3つ目の「罪悪感」に苦しみました。

妻に逝かれてから、私は強い後悔の念に襲われるようになっていました。病床の妻に対する私の迂闊な言動を振り返ってはくよくよ悩み、ひとり残されるわが身を案じて嘆くばかりで、妻を慰めることができなかった自分の不甲斐なさから自責の念にかられ、遺影の前で「すまなかったね」と謝りつづけていました。

何を考えても、最後はすべて「ああすればよかった」「どうしてそうしなかったのか」という重い罪悪感に辿りつきます。しかし、いくら罪を悔悟しても、償う相手はもういないのです。

妻への罪の意識から逃れるために、早く妻のもとに行きたい。死ねばすべての苦しみから解放されると……。

自宅のマンションの屋上から飛び降りようと思って、自宅と屋上を往復する日々が10日ほど続きました。それからがうつ病との闘いでしたね。

食欲はなく、食べるものの味がわからなくなり、気づいたら体重が47キロに激減し、衣服の着脱も靴下も履けず、失禁までするようになっており、どん底の私は、精神科の先生の薦めで入院することになったのです。

4か月の入院生活は、生きることに必要なことはすべておまかせするしかありません。ある意味で「南無阿弥陀佛」の心境です。他



力本願ですね。

落ちるところまで落ちて初めて気がつくこともありません。

人は落ちていく間は辛い。しかし、落ちてどん底に突きあたると後は上がるだけです。が、頑張つて努力しなければという自意識がいらなくなりました。

「徒然草」のなかで法然上人が目が覚めたらお念仏と言っていますが、肩の力を抜いて生きることがいいのでしょうか。

—それはまさに浄土教の教えですが、倉嶋さんは何か信仰されていますか

私は無宗教なのですが、父が長野市で「仏都新報」という仏教新聞を発行しており、若いころは多数の社員がいて盛業だったようですが、私が育った晩年は一人で細々執筆・編集し、月に1、2回発行している状態でした。

父は自分の経験から得た教訓を、さり気な

く語っていたように思います。

私は青年のころ神経症にかかり、その時、父は紙の上に1本の線を引き、「これが時間、そしてこれが現在だ。お前の心配ごと縦に並べていけば、今の心配事はたった一つだ。まずその一つと闘ってから、次の問題を考えればいい。おまえは横に並べるから、一斉に攻めたてられてパニックになるんだ。どうしても縦に並ばないときはおまえが病気か、社会や時代が病気のときだ」と教えてくれました。私は父のこの言葉で立ち直れたのです。私にとって父は人生の師でありました。

—おまかせして生きるということは、簡単なようでなかなか難しいですね。

妻の死後約2年半たって、ようやく「落ち込み」から立ち直りはじめたとき、『文藝春秋』で読者投稿『伴侶の死』の特集しているのを知り、妻を追って自殺をしようとした前

後の状況を記したものを投稿しました。

700余の応募の中から平岩弓枝さんの選の30篇に入り、雑誌に掲載され、平岩さんの身に余るコメントをいただき、高い評価を得たことが励みになりました。

昔は大家族であったり、地域社会とのかかわりが密接だったりして、伴侶の死を紛らわすものがありました。しかし、現代は核家族化、都市化されて、伴侶が亡くなると、必然的に孤独と向かい合う時間が多くなります。私も非常に孤独でした。

そこから抜け出すきっかけは妻の死について書くことでした。

書くことで、現実を直視することができたように思います。書くことができれば話すことです。同じ苦しみを持つ人たちに話を聞いてもらうのがいいと思います。

—長い苦しみのトンネルから抜け出て、今、倉嶋さんが感じていることはありますか

くらしま あつし

大正13年（1924）長野市生れ、昭和24年（1949）中央気象台付属気象技術官養成所研究科（現在・気象大学校）卒業、気象庁防災気象官、主任予報官、札幌気象台予報課長、鹿児島気象台長などを歴任、昭和59年（1984）気象庁定年退職後NHK解説委員、現在フリーの気象キャスター、理学博士、著書「風の色、四季の色」（丸善）、「日和見の事典」（東京堂出版）、「やまない雨はない」（文藝春秋）など多数、昭和61年（1986）気象協会・岡田賞、昭和63年（1988）運輸省大臣交通文化賞、平成3年（1991）第1回国際気象フェスティバル（フランス）・ベストデザイン賞、平成8年（1996）日本放送協会・放送文化賞受章、勲三等瑞宝章受章。



「今を生きる」ということでしょうか。
「昨日のことは後悔しない。
明日のことは恐れない。
そして、今日にありがとうと感謝する。」
これがすべてです。

— 貴重なお話、ありがとうございました。

誰もが経験する伴侶との死。伴侶だけでなく愛する人との死別の悲しみは、個別の苦しみです。倉嶋さんは無宗教と言われていますが、深い心の中にはお父様の仏法が生きていたように思われました。

寺院紀行

駒ヶ根

安楽寺

撮影／タカオ力邦彦

文／真山剛



安楽寺参道と山門。かつてはこの参道の所に本堂が建っていたが、商店街での火事を機に一段高い今の位置に本堂が移築された

「有名人だから来る人、仏教を学べるから来る人。これはもう違う人たちです。同じお寺の行事でも集まる人は自然と分かれていくものです」

長野県駒ヶ根市にある安楽寺の第二十四世飯田実雄住職はしつかりこちらの目を見ながら明確にこう言いきった。

人口三万四千人の都市駒ヶ根市で安楽寺を知らない人はいない。名利であるうえに昭和五十九年から始めた仏教講演会はその講師の多彩さもあり、地元の人たちにとって楽しみな行事になっているからである。その講師を列挙してみよう。

寺内大吉（現浄土宗大本山増上寺法主成田有恒）

増上寺雅楽会

紀野一義（大学教授）

美輪明宏（歌手）

林家正楽（紙切り）

有本亮啓（浄土宗僧侶）

松平実胤（真言宗僧侶）

美輪明宏（前出）

きゃんひとみ（女優）

佐藤陽子（ヴァイオリン奏者）

／ 永六輔（タレント）

／ ひろさちや（仏教研究家）

／ 松原哲明（臨済宗僧侶）

／ 小林完吾（アナウンサー）

／ 常田富士男（俳優）

／ 寺内大吉（前出）

／ 高柳和江（医科大学助教授）

／ シャクティ（インド舞踊家）

／ 神崎愛（フルート奏者）



昨年の十夜法要にはおよそ四百人の檀信徒がお参りされた

草笛光子（女優）

／ 室井滋（女優）

美輪明宏（前出）

／ バイマーヤンジン（チベットの歌姫）

こうした方たちの講演、あるいは演奏は安楽寺本堂を会場とし、本尊阿彌陀如来の前で行われるが、檀信徒や近所の人を問わず多くの人が集まる。最も集まったのが三年前の室井滋さんで、何と千人の人が本堂に集まった。

「それはすごい人でした。外陣、内陣、裏堂に立ち見の方、私とのトーク形式だったのですが、それこそぐると囲まれて、手を伸ばせば聴衆に触れられるぐらいでした」

この千人を筆頭に講師によって差はあるものの、いつでも四百人を超える人が集まる。それだけの人が入れる伽藍もすごいが、普通のお寺の行事とは内容、スケールともに違う。

それにしても本堂に多彩な講師陣だ。さて、この講師の選定を誰がしているか、というと安楽寺仏教文化会があたっている。「大正大学の大学院から修練道場を経て寺に戻ってきたのですが、最初の一年目は何をしたいのか、何ができるのか、かなり悶々としていました。法事や葬儀は先代がする。それこそやることがなくて……。ようやく二年目から始めたのが自分の得意な分野で、書道教室と仏典輪読会でした。ですが一人でできることは限られます。そこで



本堂裏にある位牌堂。およそ二千基の位牌がきれいに並べられている

檀家さんとの付き合いの中で宗教的行事と一緒に考え、やってくれる人を募ったのです。

そうしたところ、同年代の三十代が十五人集まってくれました。そこで仏教文化会と名付け、安楽寺でできること、すべきことを模索し始めたのです」

こうして昭和五十五年に発足した仏教文化会が最初に手掛けたのは「花まつり」だった。新入学児童を祝う集いの形をとり、小学一年生とその親御さん、ご兄弟など合わせて百五十人が集まる行事となった。この会は少子化で子供の人数が少し減ったものの今も続いている。

「最初の行事としては大成功とっていいと思います。ですが、それまであった敬老会を参考にしたもので、みんなの中には成功したものの物足りなさが残ったのも確かです。

そうこうしているうちに五十九年の本堂落慶法要を迎えました。その記念行事として仏教文化会が講演会を企画したのです。講演者は安楽寺と縁のある直木賞作家の寺内大吉さん。昼と夜の二度の講演でしたがともに四百人を超える大盛況。その人の集まり方に会のスタッフ全員が『これだっ』と思ったものです」

寺内大吉氏といえどご存じの方が多いだろうが、各種スポーツの解説でお馴染みのうえ、直木賞受賞の著名な作家、そして現在は浄



駒ヶ根の古刹、天台宗光前寺にある
早太郎像とお墓。駒ヶ根市は静
岡の磐田市と姉妹都市になっている
が、その縁をつないだのがこの早太
郎伝説である

土宗大本山増上寺の法主である成田有恒台下のことだが、成田台下のお父さんは駒ヶ根の出身。中坪家という安楽寺の檀家さんだった。それが上京、現在の大吉寺に入られたとのことである。つまり駒ヶ根は成田台下にとつては父親の故郷であり、子供の頃にはしばしば帰郷した思い出多い所なのである。当然知り合いも多い。

「二年目は増上寺から雅楽会の方にお越しいただき、雅楽と舞楽を楽しませていただきました。これも昼夜二部でしたが大好評」

一度ならず二度の成功に仏教文化会も大満足、それでは今度は浄土宗以外の方にと、三年目を迎える。

「三年目は永六輔さんに来てもらいました。またまた本堂はそれこそ満員御礼です。でも話の内容は仏教からは少し離れ気味。そこで、翌年、翌々年と仏教の話をしてくれる講師をお呼びしました。すると今度は話が硬くなり、ではと女優さんをお呼び。すると今度は軟らか過ぎと次は硬くする。そんな繰り返しが続きましたね」

まさに試行錯誤が始まったのである。そうした中で気がついたのが、冒頭の言葉である。

有名人も呼ぶからそれこそ安楽寺の講演会は駒ヶ根で知らない人はいないし、しかも無料で予約も必要ない。でも、講師によって集まる人も違ってくる。有名人だから来る人、仏教の話だから来る人。そうした中で飯田住職は新しい一步を踏み出す。



安楽寺にはいくつかの末寺があったが、この安性寺もその一つ。本堂前には小さなお地蔵さまがたたずんでいる





客殿裏の庭園。奥に見える書院は、
四十年前に境内にあった樹齢四百年
のけやきの古木を処分したときに建
てたもの



商店街からの入り口にある南無阿彌
陀仏の石碑。この奥が安楽寺山門だ

「ふたを開けないと誰がくるかわからない講演会を続けていく中で、住職としてみなさんの顔が見えるお付き合いをしたくなったのです。平成七年に五重相伝を行ったのがきっかけですが、寺の仏教行事に参加したい方たちが集まる会を作ることにしたのです」そうして平成八年から始まった映雪塾だ。ひろさちやさんに毎年来てもらい、仏教の初歩からお経の話、浄土の話などをしてもらった。「こちらは講義の前に必ず日常勤行をします。それに参加者には申込をしてもらいますから、みなさんの顔が見えてくる」平成十二年からはテーマを決め、ひろさん以外の方にも来てもらっている。死、老、病、家族、幸福とテーマは広がっている。

また忘れてならないのが、この会を運営する文化会と晋友会だ。晋友会は平成三年の晋山式を機に作られた会で仏教文化会より少し世代の若い人たちである。ちなみに映雪塾という名前は、明治五年に筑摩県の五十二番目の小学校が安楽寺にでき、その名の映雪小学校からとったものだ。

さて、安楽寺は名峰駒ヶ岳を望む伊那谷に天文二（一五三三）年に還夢上人が創建した古刹だ。創建当時は現在地より一キロほど西北に建てられたという。その後、正徳五（一七一五）年の大雨での寺院流出、文化六（一八〇九）年の焼失などを経て、文政七（一八二四）年に伽藍が再建されている。檀家はおよそ千八百軒、長野



駒ヶ根の顔のひとつ、養命酒工場。きれいな空気と美味しい水のこの地に養命酒が誕生したのは慶長七年、一六〇二年といまから四百年も前のことだ

県内の浄土宗寺院でも三本の指に入る大寺である。

「高校までは理科系でした。いつも忙しくていた先代を見ていましたし、お寺を継ぐのが嫌でした。でも自分しかないことに気がつき、大正大学に進学しました。」

大学で仏教の勉強を始めたのですが、チベット語とサンスクリットとの出会いがひとつのきっかけでした」

良き師との出会いで飯田住職は一転、浄土宗の僧侶への道をわき目も振らずに歩き出す。大正大学在学中に浄土宗の僧侶となり同大学院へ、修士課程を終えて大津市の新知恩院の修練道場に入る。単に僧侶の資格だけ取れば、というだけでなく少しでも多く学び取れるものをどん欲に吸収しようとする、まじめで向学心溢れる青年だった。それは大学から始めた習字が院生の時にはすでに先生として教えていたことからわかる。

そして駒ヶ根に戻ってきた。当時は父である先代有心住職が千二百軒の檀家を一人で面倒見ていた。もちろん施餓鬼や念仏講、さらに敬老会といった行事をしていたが、先代はそれを一人でこなしていた。そうした先代やお寺を見ながらそれこそ「何もすることがない一年間」を過ごしたという。

そのゼロからの出発の後は前述の通りだが、その間に駒ヶ根青年会議所の一員となり理事長も経験している。



国際協力事業団の青年海外協力隊訓練所も駒ヶ根の顔のひとつだ。この訓練所があるため、駒ヶ根には世界各国の人たちが住んでいる

今、浄土宗に限らず寺院が危機感を抱き始めているという。地域差はあるものの少子化に伴う墓地の後継者問題、若者の仏教離れや葬儀離れ、地域のコミュニティとしての寺院の形骸化。ようするに檀家制度に支えられてきた寺院が足下を見直さないといけない状況に直面し始めたということだ。

もちろん住職が寺院の在り方や僧侶というものをどう考えるかによるのだろうが、安楽寺のように住職と檀信徒や地元の住民とが協力をし、寺院でできることを試行錯誤しながらも実際に行っていくことが、これからのお寺のひとつの在り方なのかもしれない。葬儀や法事をつとめながらのこうした活動は言うや易しで実際は大変なことに違いない。実際に取材を終えるや、翌日に控えた二件の葬儀のために飯田住職は準備を始められた。年間で三桁にもなる葬儀も余程のことがない限り自分でこなすという。葬儀や法事、それに各種行事とその案内や寺報発行、それこそ目の回る忙しさの中で日々を過ごしている。

「やれることはやりますが、次のことは後に続く人たちがまた考えてくれるに違いありません」

住職は屈託のない笑顔でそう言った。



実直な飯田住職はいつも笑顔をやさな穉やかな人柄だ

表紙のことは

1月

七福神

七福神は室町時代の末期頃、農民や漁民の民間信仰として成立しました。七福は「仁王経」の七難七福という言葉が語源とされ、七つの福德をそれぞれの神に配しております。大黒天、毘沙門天、弁才天は仏教から、寿老人、福祿寿、布袋は中国道教、恵比寿神が神道から来ております。

七福神信仰は江戸時代に盛んとなり、七福神詣、宝船に乗った七福神の絵を枕の下に敷いたり、床の間に飾ったり、商売繁盛の縁起物としても喜ばれるようになりました。

連載

会いたい人
関 容子

北村和夫
さん
③



撮影／タカオカ邦彦

戦後間もないころから文学座では座員同士のカップルがかなり続出したが、北村さんの最初の結婚相手も、文学座同期の佐野タダ枝だった。

「加藤道夫の『思い出を売る男』で、神山繁のG・I青年の恋人のアメリカの女の子役がよかったし、矢代静一の『黄色と桃色の夕方』で、ぼくの弟役が小池朝雄だったけど、その恋人の威勢のいい女の役がよかった。結婚したのは昭和三十一年です。それで昭和三十五年、安保闘争の年の秋、文学座は訪中新劇団に参加して、『女の一生』を持って中国を巡演することになったんですよ。そのときちょうど佐野はおながが大きくて、心細いからぼくに行かないでくれ、って言うんです。杉村（春子）さんには是非行つて、と言われるし、ずいぶん悩んだら、佐野が長い手紙をくれましてね、私のわがままでしたから行つていらつしやい、隣りの国を見てきてこれまでと違った和夫ちゃんをみたい……って。それで感極まったことがあつて。お前は立派な女房持

つて幸せだなあ、つてみんなに言われました。

この第一回訪中新劇団は総勢七十一名。团长が村山知義で副团长が杉村春子、千田是也、滝沢修、山本安英。演目は『夕鶴』（木下順二）『死んだ海』（村山知義）『女の一生』（森本薫）『石の語る日』（安部公房）で、北京、武漢、上海、広州の各地を九月二十四日から十一月三日まで巡演した。

「中国に行つてるとき、今日生まれるか明日生まれるか、つて。行くまでの経緯が有名になつてたからね。今日は万里の長城にいるから、女だつたら万里子、男だつたら万弓かなあ、とか、バスの中でみんなが言うの。でも、今日男の子が生まれたらまずいなあ、と言つてたのが……わかるでしょ。そう、故宮博物館（笑）。まさかコキユとはね。ある朝、食堂に集つてると、二階から民芸の清水将夫さんが降りてきて、カッちゃん、生まれたよ、男の子だつて。もう、杉村さんのほうが興奮しちゃつて、あら、生まれたんですつて、男の子ですつて、つて、ね」

帰国してすぐに対面したその子は、和也と名づけられた。しかし二人の結婚生活は破綻を迎える。昭和三十八年正月、『クレランバール』（マルセル・エーム）公演中に芥川比呂志、加藤治子、岸田今日子、仲谷昇、名古屋章、神山繁、文野朋子、小池朝雄ら中堅・若手二十九名が抜き打ち的に脱退し、劇団「雲」を結成した。このとき佐野タダ枝も脱退組に加わったが、北村さんは頑として文学座に残る。

「古くさいと言われるかも知れないけど、毎日芝居で杉村さんと顔を合わせていながら、黙って何にも言わずにいて、突然お別れします、なんてことはとても言えません。そのころぼくは女房の実家に居候してましたからね。ある晩一人で家にいたら、女房から電話がかかってきて、今、脱退組の旗揚げだからこっちへ来てよ、って言うんです。そばにいた女房の両親も、そうよ、一緒に向うへ行きなさいよ、って言うし、つらい立場でしたね。女房と別れたのはそれから二年後ですけど、

別にこの分裂が直接の原因じゃありません。しかし向うの劇団の人間と女房が恋愛したんだから、原因とも言えるかな。息子の和也が五つのときに別れて、それっきり会ってません。開成から東大を出て外交官になったという頭のいいところは除いて、ぼくに似てるって話ですよ」

北村さんがその息子さんと危うく顔を合せそうになったのは、親しかった小池朝雄の葬儀のときだった。

「小池の奥さんは佐野タダ枝の妹だから、和也には義理の叔父に当るんです。ぼくは小池という男が大好きだったからね。純粹だし、詩の朗読なんかやらせたら、刑事コロンボの吹き替えでもわかるように、声がいいからとつてもよかった。葬列のすぐそばに和也がいて、みんなハラハラしたそうだけど、ぼくは全然気づかなかった。向うはどうも知ってたらしいけどね」

北村さんは四十二歳のときに、二度めの結

リヤ王



婚をした。相手はぐつと年下だった。

「そのころ、博多で『女の一生』の一週間以上の長い公演があつて、翌年また『欲望という名の電車』で博多へ行つた。誰かに、千緑という飲み屋の娘はいい女だよ、と言われて行つてみたら、なるほどいい女なんだね(笑)。

口実にボーリング教わつたりしたけど、背は高いし、これがカッコいいんだ。杉村さんは舞台のあと、みんなと一緒に御飯食べたがるんだけど、ここでダメ出しばかりされるから喉通らないんですよ。じきに抜け出して飲みに行つちゃうものだから、どうしたの？ まだ帰らないの？ って、杉村さんも薄々感づくわけよね。そのうちに、NHKの人を後見人に立てて、向うの親父さんに許可をもらいに行つて、九州で結婚。でも、杉村さんは、あんまりいい顔しなかつたね」

仲間うちの披露パーティーは、文学座に近い四谷の鉄道弘済会のクラブで会費は二千元。

「司会が加藤武と小沢昭一だから、さんざんヘンなこと言われ放題(笑)。水谷八重子

(初代) さんなんか来てくれましたよ。肝心の杉村さんと言えね、一時間くらい遅刻して、きれいな和服姿で来ましたね。まあ、いやだったんだろうな。もう旦那さんも亡くなつてたし、杉村さんとしくは結婚するんだとみんなに思われてましたからね」

だが、この結婚によつて北村さんは、若手俳優として近ごろ活躍の目立つ北村有起哉、文学座女優の北村由里という二人の後継者を得た。

「由起哉が、ぼくには兄貴がいるらしいけど会わしてくれないか、つて言うんで、会いたきゃ自分で会いに行つてこいよ、つて行つた。女房の親父が今と一緒にいるんだけど、子供同士、つみはなかばい、会いたきゃそのうち会いにいくばい、つて。九州の人だからね」

北村さんにとつて、いくら語つても語りつくせない人物は、やはり杉村春子だろう。

「日本を代表する大女優の杉村さんだけど、私生活では寂しい人でしたね。最初の御主人

を病気で亡くして、昭和二十五年に石山先生というお医者さんと再婚したけど、それも十何年かで死別した。昭和四十一年の夏、病気の御主人を置いて『欲望』の北海道巡演に出てたときですよ。旭川公演の宿泊先に、石山先生死す、という電報が入った。演出の木村光一を中心に、夜中にぼくたちが集って、明日は杉村さんが舞台に出られないかもしれない、というんで、ステラ役がダブルキャストで、もう一人の松下砂稚子がブランチ役を代ることも考えたけど、台詞が八百もあるからひと晩で憶えられるわけがないんですよ。でもできる限りは憶えておこうというんでみんなで協力して一生懸命だった。時はどんどんたって行くし、誰も一睡もできませんよ。で、明け方になりました。正直に言おう、ということになって、お早うございます、って何人かで杉村さんの部屋に行きました。杉村さんは鏡台の前に座って、髪を梳かしてましたけど、鏡の中からぼくたちのただならぬ様子を見て、察したんでしょう。なあに？ あ、そ

う、って言ったまま、櫛を持つ手がじつと止まっちゃってね。今日これから帯広公演がありますからよろしく、ってみんな居なくなっちゃったけど、ぼくはすぐ引き下がるわけにはいかないじゃない。ぼくだけ残ってたら、彼女がワァーッと泣いてぼくに抱きついてきた。『女の一生』の第一幕で、堤家にまぎれこんできた布引けいが栄二のぼくに見つかってワァーッと泣き崩れるみたいだな、なんて思いながら、どうぞ思い切り泣いてください、だなんて……よくそんなことがいえたな、と思いますけどね」

しかし、帯広公演は代役も立てず、杉村春子は素晴らしいブランチを演じてみせた。

「ぼくは自分の出番のないときは、袖から食い入るように見守っていましたけどね、あのときのブランチの何ときれいだったこと、哀切だったこと、そして完璧だったこと……ね。それはもう、その場に居合せた者にしかわからない、演じることの極限を見たような気がして、ぼくはもうボロボロ泣きながら、感動

花咲くチェリー



欲望という名の電車



で震え続けていたものです。杉村さんは、御主人にちゃんとつくせなかったことを心底悔いてるみたいで、あんなに辛い旅公演はなかったと思いますよ」

そして杉村春子が亡くなったのは文学座創立六十周年を迎える平成九年の四月四日。九

十一歳の生涯だった。

「六十周年記念公演の『柘榴のある家』（八木隆一郎）で、杉村さんとぼくが久々に夫婦役だというので、張り切ってました。ところが二月に杉村さんが十二指腸潰瘍で入院しちゃって、でもベッドで台本読んでると聞いて、やっぱり不死身の人なんだ、と無理に自分に思いこませていたんですが、見舞いも拒絶されたまま、とうとう彼女に死なれてしまいました。ぼくをここまでに作りあげてくれた大先輩であり、一番多く組んだ相手役であり、言わば母親であり、恋人でもあった杉村さんが居なくなると、ぼくは突っかい棒を失ったみたいにヘナヘナとなっちゃってね。七十にもなる男が、葬儀では人目もはばからずに泣きましたよ」

北村さんは思い出す。杉村春子の『鹿鳴館』（三島由紀夫）の朝子役のロープデコルテ姿がどんなに美しかったか……。

「そうそう、いつかテレビドラマの『鹿鳴館』で、スタジオで収録するんだけど、リハーサ

ルでもスタッフは芝居なんか全然観てないよ。うな連中で、ザワついてるんですよ。それが、偽の壮士たちが鹿鳴館に乱入するのを、杉村さんの朝子が階段の下に向って威圧するように立て続けに台詞を言うところになったら、みんなその迫力、その貫録にびっくりして、息を吞んで杉村さんの芝居を見てました。ザマミロ、と思ってるね。あのシーンは今でも忘れられない」

そして北村さんがしみじみと言う。

「宮本武蔵の言葉だったか、出ずる月を待つべし、散る花を追ふことなかれ……というのがあるけど、杉村さんが散ったあと、ぼくにとつての出ずる月、つてのはなかなかないよ。生涯、杉村さんにこだわって続けていくしかないね、こうなったら」

（了）

代替医療を 医療の現場へ

CAMUNET / 代替医療利用者ネットワーク

井上朝雄

埼玉県川越市にある帯津三敬病院。ベッド数九十九床という、病院としては中規模のところが、いまやすっかり全国的に有名になってしまいました。

なぜか。それは、がんという病に代替医療を積極的に取り入れた治療を実践している病院だからで、テレビや雑誌などで「がんの代替医療」というようなテーマが取り上げられる場合、取材されていないことはないと言っているほどです。

院長は帯津良一先生（現・名誉院長。六七歳）。東大医学部を卒業後、同付属病院第三外科、都立駒込病院外科医長を経て、一九八二年に自前の病院を開設されるのですが、その理由が近代西洋医学一辺倒のがん治療のあり方に対する疑問からでした。

「がんの研究や治療法は日進月歩なのに、再発率はちつとも下がっていない。これは何なのか？」

現代医学は人間をパーツで診る医学、ということは前に書きました。がんで言えば胃がんなら胃、肺がんなら肺、というように局所的に診、治療します。しかし、人体を解剖すると臓器と臓器の間には空間が存在します。ひよつとしたら、この空間に生命の意味があるのでは？ 帯津先生は、ここから「場」という考えを導き出します。

臓器は臓器単体で機能しているのではなく、目には見えないけれども、その空間を通じて他の臓器とも複雑につながり、そして「場」の中で機能することにより、「生命」というものをかたちづくっているのではないか。病気は局所で診るのではなく、その人が生きている「場」

の全体で診なければならぬのではないか？

そこから、「生命場」という発想につながっていきま
す。そして、「全体で診る医療なら中国医学だ」という
ことで、中国医学へ関心を向けます。ところが、当時の
医学界は、というより多分にいまま、そんな考え方を認
めません。だったら、自前の病院を建ててやるしかない
——それが、端折っていえば帯津病院が生まれた理由で
した。だから、まず取り入れられたのは鍼灸、漢方薬、
そして氣功でした。氣功については病院棟の脇に畳敷き
の道場が建てられ、いつ行っても何らかの氣功の教室が
開かれており、患者はいつでも何らかの氣功のできるよ
うになっています。その次に、「こころの問題も重要だ」
ということでも心療内科や、イメージすることが効果を生
むというイメージ療法が取り入れられます。

さらには、そうした「非通常」な治療をやっていると
いうことで、患者さんたちがいろいろな代替医療の相談
をし始めます。「〇〇がいいと言われたけれども、やつ
ていいだろうか」「××というサプリメントを女房が持
ってきたから試してみたいんだけど」。あるいは、
「手術を言われたけれども絶対にいや」「抗がん剤だけは
やりたくない」というような患者さんもやってくるよう
になりました。そして「医者からは、もう手立てがない

と言われた」というような人も……。

とはいえ、だからといって帯津病院に入れば誰もが
治って退院できるのかといえば、そんなことはもちろん
ありません。めざましい治癒力で回復する人もいれば、
残念ながらお亡くなりになる人もいます。しかし、いま
やがんに対する現代医学の方法論の限界も指摘される時
代になりました。なのに代替医療も試したいというがん
の患者にとって、医学界の大半はまだまだ寛容ではあり
ません。

いま、がんの患者でなにがしかの代替医療をやってい
ない人はいないと言われますが、帯津先生はそうした患
者からの相談に乗り、アドバイスしながら、「患者とと
もに総力戦でがんと闘う」ということを、二十年前から
やってこられたのです。

病を治すのは医者ではなく患者自身である——と以前
書きましたが、代替医療などについても、患者が主体的
に「これをやってみたい」と思う前向きな心のあり方が
大事なのだ、と帯津先生は言います。

まず「心」が土台。その上に「氣功」と「食事」とい
う自然治癒力を高める日常の基本。西洋医学やその他代
替療法は二階部分——それが帯津先生が考える「病を克
服する家」の構造なのです。

ある人がありとあらゆる地方を巡り歩いてみたが、十分心してみても、自分自身よりも愛おしいと思える人と出会うことがなかった。その人と同じように、他の人々もまたそれぞれ自分自身が愛おしい。それ故、自分を愛するものは他人を殺めるべきではない。

釈尊『ウダーナ』（試訳）

*『ウダーナ』……パーリ語の詩や文章で綴られた仏典。釈尊や仏弟子、信者たちにまつわるエピソードや教えが集められている。

一月二十五日に思う

お釈迦さまの時代、インドのコーサラ国に仲睦まじい国王夫妻がいた。ある時、国王が「君は誰が一番愛おしいか」と王妃に尋ねた。

王妃はしばらく考え「私は王が一番愛おしいと思っておりましたが、実際のところ自分が一番愛おしく感じます」と答えた。

そこで、王が言葉を返した。「妃よ。私も同感に思う」と。

この会話、みなさんは、どう思われるであろうか。

じつは法然上人のご法語に、次のようなお言葉がある。

往生程の大事を上げみてすべき念仏申さん身をば、いかにもいかにもはぐくみたすくべし。〔禪勝房伝説の詞〕

悪業を犯す人でもやはり我が身は愛おしい。まして来世の浄土往生という一大事を目指してお念仏を称えるのであれば、是非ともその身をいたわり大切になさい、との意味である。

「お念仏を申す限りは、他の誰でもない、あなたが往生するのですと。その身を大切にしなさい」と受け取るならば、「他の誰でもないこの私」という国王夫妻の会話と軌を一にはしないだろうか。

ところで法然上人のご命日は一月二十五日だが、平成十二年のその日は、長野に住む私たちにとって大本山善光寺大本願第二百十世、一條智光法主台下のご命日として刻まれている。

その智光上人がよく口にされていた言葉がある。

「みなさん、くれぐれもお体を大切に」

何の変哲もない。しかし、よく味わってみると「健康に注意しなさい」程度の意味には思えない。法然上人のお言葉を思い出して欲しい。「くれぐれも」と前置きされた意図がはつきりしてこよう。

「誰あれ浄土往生を願って念仏申せば、それが叶う。御仏のもとに往生する身なのだから、くれぐれも大切に」ということなのだ。

さて、再び話をコーサラ国の国王夫妻に戻そう。

二人は「自分こそ一番愛おしい」と会話を交わした後、お釈迦さまのもとに訪れた。本当に愛し合っているのか、お互い薄情なのではないか、少々不安になったのかもしれない。お釈迦さまは二人の話に頷きつつ、冒頭のお言葉のごとお答えになられた。

私なりに言い換えてみよう。

「そうとも、誰でも自分が一番愛おしい。だからこそ、我が身を愛おしむことは、同時に他人をいたわることとなければならぬ」

そうなのだ。己を愛おしむことは、他人を愛おしむことであるのだ。加えて法然上人の教えに従えば、そういう生き方は来世のあることを信じ、浄土往生を願うのはじめて可能になるのである。

人生を達観したつもりになり、「あの世なんてありやしない、私には仏も極楽も無縁、死ねば無になるだけ」などとわけ知り顔に開き直るならば、おのずから自堕落に振る舞い、やがて他人のいのちさえも軽んじ、悪業を重ねてしまふのではないだろうか。

一月二十五日。お釈迦さまや法然上人のお言葉とともに、私には智光上人が残されていったお言葉が思い起こされる。

「お念仏申す者同士、お互い浄土往生を遂げる我が身です。それぞれ人生を愛おしみ合い、自分を大切にしましょう」とのメッセージが伝わってくるのである。

（浄土宗総合研究所 袖山榮輝）

法然上人を
めぐる人々

一の谷序章



◆第四回◆

石丸晶子

絵・石川忠夫

(十)

「そのとき傍らにいた備中守（師盛）の話によれば」

と経盛は、

「左中将殿（清経）は、海に身を投げられる前、法然上人のことをしきりに話しておられたそうな」

「ほう、法然上人のことをのう」

宗盛がいった。

「都に今一度帰りたいのは、残してきた女のためでも、昔の栄華が恋しいためでもおなうて、法然上人に今一度会いたいためじゃ、といわれたそうな」

「それはまた殊勝なお心がけじゃが、なぜまた法然上人なのでありましようや」

教盛が訪ねた。

「十方衆生すべての者は、みだの本願によつ

て、まごころから念称すれば、必ず浄土に往生できる、というのが上人の教えでございませうが」

と経盛はつづけて、

「小松殿（重盛）は御生前、信心深うおわしましたによって、官位なき僧侶ながら、町のうわさに、法然房高德の聖なることを耳にされて、屋敷に招き、その教えを何度か聴聞されたのよ。お子たちにもお聞かせになったということじゃった」

「都にいるとき、日に日に法然房の庵室に集う人々多きことを、たしかにわれらも聞き及んでおりましたが、その法然房を、入水される前、左中将殿が思い出されたとはな」

呟くように教盛がいった。

「しかし、大臣殿（宗盛）、修理殿」

と経盛は傍らの二人に呼びかけると、視線を幔幕の外に投げた。経盛の視線がむかうと

ころには、今、幾千万もしれぬ武者たちが、平家の赤旗の下、そこここにたむろしている筈だ。

経盛は一つ深い吐息をついて、

「長楽寺の阿証房印西、大原の本成房湛敷たんしゅうその他、高德のほまれ高い聖は今の世に多うございます。また仁和寺の御室や比叡山の天台座主をはじめ、身分高く尊い僧侶も、数えあげればきりがありますまい。なれど、のう門脇殿」

と経盛は弟の教盛をかえりみて、

「入水される前に、なぜ左中将殿が、他の高僧ではのうて法然房を思い出されたか、ということです」

経盛はつと、宗盛と教盛に対して幔幕の外の世界を目配ばせしてみせた。

「都にいたときとは違う。明日の命がわからぬ戦さのさなかでござる」

宗盛、経盛、教盛、この三人の視線がむかう幔幕の外側に、平家の旗じるしである赤旗が、幾すじか風にはためいている。

(十一)

「日々、これ戦陣のなかにあれば、寺社まいりもかなわぬ。いかにみ仏の教えが奥深こうても、そのみ教えを聴聞しておるゆとりとでない」

「……」

教盛はもはや蜜柑を食べることなど忘れて黙したまま兄経盛の次のことばを待った。

「造寺造仏をおこない、身を律して仏道修行にはげむことの尊きことを教えられてまいったが、それとて戦乱の風が吹きあれておらぬときのこと」

経盛はそういうと、深い歎息とともに、
「なれど、それら一切がかなわぬのが今のわ

れらではないか。戦陣のさなかとは、まことに悲しいことよ」

「まことにその通りでございますな」

黙したままの教盛に対して、宗盛が蜜柑を口に運びながら、間のぬけたような声でいった。

「み仏を造り、寺を寄進し、それで先祖を供養してわれらの後世をも祈る。都にいたときは当然の行ないと思われたことが、今ふり返ってみれば、あれはみな、人の世が落ち着いておるときの話であった。戦乱のさなかにおかれておる者には、何の力にも、慰めにもならぬものでありました」

経盛がそういうと、彼ら三人の間に沈黙が落ちていった。宗盛も、何を思ったのか、蜜柑を食べていた口を手で押しぬぐうと、黙ったまましきりにうなずいている。

と、やがて教盛が、胸にこみあげてくる思

いを一気に吐き出すようにして、

「まことに、それらは今のわれらには何の力にも、慰めにもならぬ。戦乱の巷にあるものを救いうるのは、念仏往生の教え、只一つでありましたな」

「念仏往生の教え一すじに回心したのが、法然房という都のうわさであった」

経盛はそういうと目をしばだたいて、
「左中将殿も、太宰府でのあの騒ぎのあったとき、念仏往生の法然房を思い起こされたのであろう。われらも今一度都の土を踏むことができたならば、御房の庵室を訪れ、み姿を仰ぎたいのう」

「力にみちた、輝くばかりに尊いみ姿で、あみだの再来という、もつぱらの都のうわさであったが」

教盛がそこまでいうと、宗盛が途中でさえぎっていった。



「法然房の高徳なることは、われらも聞き及んでおりましたが、お年はおいくつ位の御房でありましたかの」

「しかとは存じませぬが、われらも一度、院（後白河法皇）が御所に招かれて法然房の法話を聴聞された折、席につらなつたことがございます。はて、今は五十位にもなられましようか」

（十二）

「ほう、修理殿は一度法然房にお会いか。それは羨ましい」教盛がいった。

「いや」

と経盛は首を振って、

「人間とは罪深いものでございます。院御所で法然房の法話の席につらのうたとき、われらが心は高位の御僧たちに向かつておつて、法然房の法話も、十方衆生悉皆浄土とは有難

いみ教えよと、通りいつべんに思う位で終つてしもうた。それが」経盛の唇からかすかな歎息がもれた。

「一切を失うた今になって、なぜか法然房の姿のみが大きく思い出される。院御所に入りまする高位の僧たちではのうて、なぜか無位無官の御房の大きさが心に迫まってくる。そのみ姿も思い出されてならぬ」

「われらも法然房のうわさはよう聞いておりましたが、はてどこで修行された御僧でしたかの」

ふたたび宗盛が訊ねた。

「叡山で修行中は、智慧第一の法然房ともつばらの評判でありましたそうな」

「ほう、叡山で智慧第一とのう。そういえばわれらも、都におりましたとき耳にしたような気がいたしますが」宗盛がいった。

その宗盛に経盛は、

「叡山に登ったのはいまだ稚児のころ、と聞き及んでおりますが登った理由が、またひとりではありませぬ」

「それは又いかなる理由ありてか」教盛が顔を経盛のほうにむけて訊ねた。

「法然房は美作の出でございますが、幼きとき、押領使をしておりました父親が殺されましたそうな」

「何とまた」

教盛が驚きの声を小さくあげた。

「その事件で法然房の一家は離散。御坊は山中の寺に逃れた由でございますが、父親は息をひきとるまぎわに、幼き法然房にいい残したそうでございます」

「遺言でござるな」教盛がいった。

それをうけて経盛はうなずきながら、

「決して復讐を考えてはならぬ。それよりも汝は一刻も早く出家し、父母の菩提を弔い、

汝自身の後世をも全うせよ、と父親はいい残したと申します」

「偉大な父親でござるな」教盛が歎息していた。

「して法然房は叡山にのぼつてか」

「そうでございます。なれど叡山に登ったのちも、二十五年の長きにわたつて道に迷い、修行を重ねに重ねた末に、念仏往生に回心したと聞いております」

「その法然房を、左中将殿は柳ヶ浦で思い出されてか」

宗盛がしきりにうなずきながら嘆声をあげた。

(つづく)

平成十五年

浄土門主
総本山知恩院門跡第八十六世

中村康隆

大本山増上寺
法主

成田有恒

大本山金戒光明寺
法主

坪井俊映

大本山百萬遍知恩寺
法主

大野忍敬

大本山清浄華院
法主

大田秀三

大本山善導寺
法主

阿川文正

大本山光明寺
法主

宮林昭彦

大本山善光寺大本願
法主

鷹司誓玉

浄土宗宗務総長

水谷幸正

大本山増上寺執事長

江口定信

〒105-0011 港区芝公園四・七・三五

平成大事業
御影堂屋根替大修理完成
阿弥陀堂新築再建完成

美作 誕生寺

〒709-3002 岡山県久米郡南町里方八〇八
TEL〇八六七 (二八) 二二〇二
FAX〇八六七 (二八) 二二六二

〒154-0017 世田谷区世田谷四・七・九

大吉寺

住職 成田昌憲

長野教区
十念寺住職

袖山 榮真

〒380-0865 長野市西後町一五六八

清水湊 貝付毘沙門天

忠高山 實相寺

〒420-0839 静岡市鷹匠二丁目二十四番十八号

玉桂山 華陽院

電話〇五四(二五二) 三六七三
FAX〇五四(二五二) 三六七三

学大乗淑徳学園理事長
淑徳大学学長

長谷川 匡俊

〒174-8665 東京都板橋区前野町五・五・二

学校法人 淑徳学園
理事長

佐藤 良純

淑徳学園中学校・高等学校
校長 大谷 壽雄

塩釜市 雲上寺

東海林 良雲

浄土宗大願寺住職
浄土宗議会議員

神谷 英敏

正覚寺

住職 江藤 英賢

〒915-0813 武生市京町二・一・八
TEL〇七七八(一一一) 一一一九
FAX〇七七八(一一一) 六二一七

世継地藏 上徳寺

塩竈 義弘
塩竈 義明

京都市下京区富小路通五条下ル
本塩竈町五五六番地

弘経寺住職

金田 進徳

〒302-0823 茨城県取手市白山二・九・二八

大 蓮 寺

〒371-0022 前橋市千代田町三・三・二四

孤峰山 蓮馨寺 客殿落慶御礼
宝池院 吞龍上人奉祀

糸原 恒久

〒350-0066 川越市蓮雀町七・一
電話〇四九(一一二) 〇〇四三
FAX〇四九(一一二) 〇六七六

赤坂六地藏尊

浄土寺

〒107・002 東京都港区赤坂四・三・五
電話〇三三・二五八・二二六・二二〇

明福寺

福井豊信

〒132・0013 江戸川区江戸川三・八・一

伊勢教区

山下法文

松阪市樹敬寺

愚鈍院 住職
こつぶがや文庫主

中村眞道

〒984・001 仙台市若林区新寺三・一一・一七
電話〇二二・二二五・〇六〇・五七

宗源寺

齋藤价洲

〒110・0015 台東区東上野五・一・六

函館

称名寺

〒040・0055 函館市船見町一八・一四
電話〇一三八・二二二・〇五七四

勝願寺

〒365・0038 埼玉県鴻巣市本町八・二・三一
電話〇四八・二五四・二〇二・二七

骨仏の寺

一心寺

〒543・002 大阪市天王寺区逢坂二・八・六九
電話〇六・六七七・二〇四・四四

晴雲寺住職

塚田弘導

〒254・0006 平塚市立野町六・五
電話〇四六・二二二・二六三八

貞松院住職

山田和雄

〒392・0004 諏訪市諏訪一・一六・二二一
電話〇二六六・五二二・一九七〇

〒112・0002 東京都文京区
小石川三丁目十四番六号

傳通院

電話〇三三・三八一・四三七・〇一（代表）

定義如来

西方寺

〒989・0013 仙台市青葉区大倉字上下一
電話〇一一・二二九・二二二・一〇一
HomePage <http://www.johg.or.jp/>
E-mail saihouj@johg.or.jp

平成十五年

花巻 廣隆寺

谷地玄雅

九品阿彌陀如来

淨眞寺

〒158-0003 世田谷区奥沢七、四一、三
住職 清水英頼

願行寺住職

佐藤成順

〒140-0004 品川区南品川二、一、一一

梅窓院

住職

中島真成

東京都港区南青山
2-26-38

電話 03 (3404) 8447
ホームページ

<http://www.baisouin.or.jp>

鎌倉大仏殿

高德院

〒248-0016 鎌倉市長谷四、二、二八
電話 〇四六七 (一一) 〇七〇三
FAX 〇四六七 (一一) 五〇五一

天光院

真野龍海

<http://www.evamre.jp/venkoin>
ryumano@venus.dlne.jp

光田寺住職

佐藤良純

〒112-0002 文京区小石川四、二二、八

横浜

大光院

www.daikoin.com

浄土宗東京教区教区長
光取寺

大室了皓

〒141-0002 品川区上大崎一、五、一〇
電話 〇三 (三三四) 八三八四



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウォッチング、紀行文、その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●和

〔特選〕和太鼓の撥の音冴えて秩父山車

大場 清

「和」はむづかしい題のようで、一様に苦勞しているのが見える。この句も「太鼓」だけで分かるのに、あえて付けた。それでもややひなびた所での祭りの様子が、一句からにじみ出てくる。

〔佳作〕虫干しや形見の和服もて余す

細田 初枝

崩すには惜しき和菓子 of 栗の毬

片桐てい女

和楽器の調べになごむ月夜かな

増田 信子

●ベルト

〔特選〕枝払う腰にベルトの縄荒く

佐藤 雅子

この題にも誰もが苦勞したようだ。例えば「荒縄」で済むところを伸ばして、それで一句ができたのである。いろいろの題に戸惑い

ながら、どういう題にも対応できるようになるのだ。

《佳作》冬立つやミシンベルトの調子よし

金谷 友江

帰省子の腕の時計のベルト跡

片桐てい女

ベルト穴一つ緩めて葡萄狩り

佐藤 まり

●自由題

《特選》雪しんしん子の亡骸の髪を梳く

片桐てい女

逆縁である。子の髪を梳くということは久しくなかったが、これが最後ののだ。話しかけながらねんごろに梳いている。梳くにつれて、いよいよいとしさが募ってくる。雪はしんしんと降り続いている。

《佳作》相席の座布団小さし走り蕎麦

藺田 郁子

大きくさめ不漁の漁夫のひとつきり

池田 伊吹

裾ふんで着丈を決める足袋白し

北川 弘子



名波自由題

◎季語ではありません

浄土誌上句会のお知らせ

参加作品 編集部選

和

御和讃にひとみ潤ませ十夜かな

河合富美枝

和筆笥の奥に眠れる母の夜着

中島富士子

逝く秋の和服楽しむ茶会かな

金谷 友江

秋袷昭和の時代は長かりし

嶋田喜代子

和綴じせる亡母のノートや夜半の冬

山本美代子

ベルト

冬立つやミシンベルトの調子よし

金谷 友江

締切・二〇〇四年一月二十日

発表・『浄土』二〇〇四年二月号

選者・増田河郎子(『南風』主宰)

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

寒鯉のベルトコンベアに行儀よし 中島富士子

行く秋のこぼれ客呼ぶベルト売り 河合富美枝

自由題

山峡の水生きいきと蕎麦の秋 大西 明子

逃げやすき日差しを追いて冬仕度 島谷ときを

太刀魚の死にても口の怒りかな 寺下 忠至

嘘ついている子の服に草じらみ 板倉左武朗

一色の虫の音となる宵の闇 小林 恵美

お詫び

昨年の十二月号におきまして、福富寛成先生、御代英資先生の原稿に多数の校正ミス及び不備なところがありました。ここに両先生及び読者の方々に深くお詫び申し上げ、直ちに刷り直しを致しましたので正本ご希望の方は、事務局までご一報いただければ、お送りいたします。

本誌12月号の表紙裏、背表紙裏の「表紙ライブラリー」が11月号と同じ内容だったことをお詫びいたします。

さっちゃんね

7 かい目

かまちのころ



編集後記

雪囲い人の心も暖める

岱潤

昨年養老孟司さんの本『バカの壁』が大ヒットした。どんなことが書かれているのかと思ひ読んでみると、確におもしろい。一気に読み、そして深く考えてしまった。

話せばわかるなど大嘘。わかっていると思う人ほど、実はわかっていない。人は変わり、情報は変わらないなど……。一つ一つ納得しながら読み進んでいる内に話は人生の意味、人間の存在理由ととてもない方向に進んでゆく、養老さん自身が書き下ろしたのではなく、話していることを編集者がまとめたということが伝わってくる。その分、養老さんの言いたいことが凝縮されている感じがした。

雑誌『浄土』

特別会員、維持会員の方々

巖谷勝正(目黒・祐天寺)
大田秀三(大本山清浄華院)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光門寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
袖山榮真(長野・十念寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
塚田弘導(平塚・晴雲寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村眞道(仙台・愚鈍院)
樋口隆信(石巻・西光寺)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
真野龍海(芝・天光院)
宮林昭彦(大本山光明寺)
宮林雄彦(横浜・大光院)
山田和雄(諏訪・貞松院)

敬称略・五十音順

十一月に熊本で起きた、ハンセン病元患者に対するホテルの宿泊拒否事件の続報を聞いた。ホテルの総支配人のおざなりな一回目の謝罪を拒否したハンセン病元患者に対して、えげつない批判中傷が後を絶たないというニュースである。この国の人々がどんな冷酷にそして残酷になっているような気がしてきた。病気のことは知っている。自分ではみんなの声を代表しているのだと、まさにバカの壁である。こうした心の人々には、確かに話してもわかってもらえないことはないだろう。人は思いやりのある優しい生き物であるという常識は、もはやこの国では通用しうにない。新しい年を迎え、がらりと様変わりする人間を期待したい。(長)

ホームページ <http://www.jodo.ne.jp>

編集顧問

大室了皓

編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
村田洋一

浄土

七十巻一月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷 平成十五年十二月二十日
発行 平成十六年一月一日

発行所 真野龍海
編集人 佐藤良純

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一一
東京都港区芝公園四・七 四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七八)六九四七
FAX 〇三(三五七八)七〇二六
振替 〇〇一八・八・八二二八七



昭和39年6月号



昭和39年7月号



昭和39年8月号



昭和39年9月号



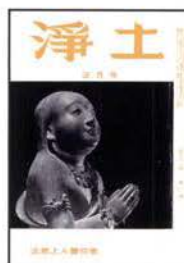
昭和39年10月号



昭和39年11月号



昭和39年12月号



昭和40年1月号



昭和40年2月号



昭和40年3月号



昭和40年4月号



昭和40年5月号



昭和40年6月号



昭和40年7月号

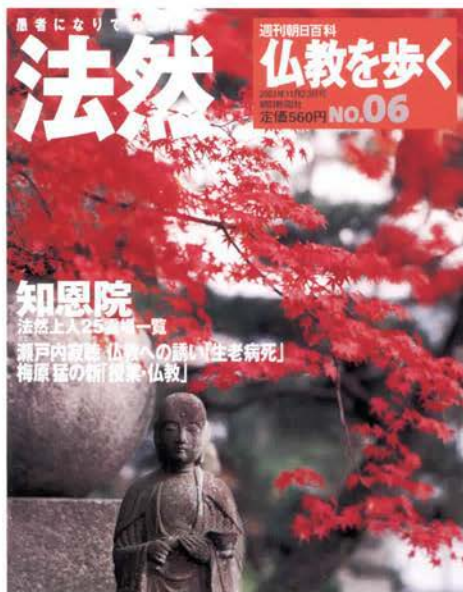


昭和40年8月号



昭和40年9月号

日本人のところに響く、仏の教え。 “ゆたかな生き方”マガジン!



豪華二大連載 全30冊



瀬戸内寂聴
「仏教への誘い」



梅原 猛の
新「授業・仏教」

主な内容

- ◆法然とはどんな人?
底辺の人々と共に涙した革命者—石上善應
- ◆法然のことば
既存の仏教を全否定した骨太思想—町田宗鳳
- ◆法然ゆかりの旅
知恩院／増上寺／法然上人二十五霊場
- ◆仏教 見る・聞く・ふれる
法然が歌に詠んだ「浄土」／阿弥陀仏の見方

- 四国遍路—徳島県・恩山寺から立江寺
- 食べる仏教「養老蒸しと里芋茶巾絞り」

愚者になりて往生す

法然

6号
好評発売中

極楽往生するには、ひたすら念仏すればよい。
画期的だった法然の教えを解説するとともに、
いろいろな人々から敬愛された法然の実像に迫ります。

「専用ファイル」も同時発売

◆定価1,200円(税込)／1巻
(1巻に10冊収納できます)



週刊朝日百科

全30冊

仏教を歩く

好評既刊

- 1 弘法大師空海
- 2 最澄
- 3 道元
- 4 日蓮
- 5 親鸞
- 6 法然
- 7 良寛
- 8 榮西
- 9 西行
- 10 蓮如
- 11 明恵・寂尊・慈性
- 12 一 遍 以下続刊

毎週火曜日発売 定価560円(税込) 創刊号サービス定価480円(税込)

A4判変型・逆中綴じ・オールカラー36ページ(創刊号44ページ) 一部地域で発売日が異なります。

お求めは書店・ASA(朝日新聞販売所)へ。
<http://www3.asahi.com/opendoors/>

朝日新聞社